

## IV 評価・分析

# 1 ルーブリック

年度当初の5月と年度末の2月に、全校生徒を対象にルーブリックによる自己評価を行った。年度当初は、ほとんどの生徒がすべての項目において、C評価が30%程度、B評価が40～50%程度という評価であった。しかし、一年間の活動を通して大幅な成長が見られるようになった。各項目においてC評価が大幅に減少し、A評価以上の評価が50%を超えている。また、判断力・実践力・調整力・コミュニケーション力においては熟達レベルであるS評価をつけている生徒もあり、生徒の変容を感じることができた。特にコミュニケーション能力では20%の生徒がS評価をつけるなど、著しい成長が見られた。5月の時点では、1年生はC評価を多くつける生徒が多く見られる一方、本年度までに探究活動を行っている2、3年生では、5月の時点でA評価やS評価をつける生徒も見られるなど、積み重ねによる成長が見られた。外部人材との協働や探究活動を通して、生徒の力が伸長したことはもちろん、成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高めたことも影響しているのではないかと考えられる。来年度も、生徒の力を育成することはもちろん、生徒一人一人が、やりがいや自己有用感を感じることのできる探究活動を行っていきたい。

令和2年度 三崎高等学校地域活性化プロジェクト ルーブリック		( ) R ( ) 番 氏名 ( )			
学習成果	レベルC	レベルB	レベルA	レベルS	
評価項目	初心者・初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熟達・職人レベル <統合・普及>	自己評価	評価理由
	計画力	判断力	実践力	調整力	コミュニケーション力
地域活性化プロジェクトプランの計画	サポートを受けながら、プロジェクト全体の概要を理解している。 31%→11%	自分のプロジェクトに必要な情報を収集し、自ら計画を立てることができる。 47%→27%	自分のプロジェクトについて、現状や実現性を客観的に分析し、修正することができる。 22%→62%	自らが、成功する計画を立てるとともに、他者のプロジェクトについても的確なアドバイスをすることができる。 0%→0%	・入学時は特に地域活性化には興味があなかったです。今は、自分のやりたいことと、地域創生活動をつなげられていると感じられるから。(A)
	サポートを受けながら、自分の地域の特徴を理解している。 31%→9%	自分のプロジェクトの現状や課題について必要な情報を収集し、適切に判断できる。 44%→31%	情報を収集・分析するとともに、現状を踏まえ、プロジェクト達成のための判断を適切に行うことができる。 18%→47%	プロジェクト達成のために、統合的な情報に基づき、全体的な立場で考察・判断することができる。 7%→13%	・裂織りのプロジェクトを作ったことで、情報を収集する段階からゴールに向けての行動の仕方を考えられるようになったから。(S)
地域活性化プロジェクトプランの実践	サポートを受けながら、プロジェクト達成のために自分が必要とすることを理解している。 38%→10%	プロジェクトの目的と自分の役割を理解して、知識や経験を活用して自発的に行動している。 62%→61%	プロジェクトの状況を観察・分析し、目的の達成のために強弱変化に行動することができる。 0%→27%	プロジェクト全体を総合的に把握して、これまでの経験を生かしながら、リーダーとして活動することができる。 0%→2%	・5月は、先輩方について行って体験をやっているだけだったが、今は引継いでいく側になったので、班集体が良くなるように周りの状況を見て行動することができるようになった。(A)
	プロジェクトチームのメンバーには、様々な立場や意見があることを知っている。 33%→8%	多様な意見や立場の違いを理解し、周囲の人々や物事との関係を調整することができる。 45%→27%	多様な意見や立場の違いを認め、学び合うことで、意見をまとめるだけでなく、新たな考えを発見し深めることができる。 22%→56%	幅広い年代の人や、自分とは異なる意見の人など、どの様な人とも協働して活動することができる。 0%→9%	・他学年から出た意見が自分たちの意見と違った時などに、相手も自分たちも納得がいくような提案をすることができた。(S)
コミュニケーション	プロジェクトの内容を理解し、相手に伝えることができる。 38%→9%	自分が伝えたいことを適切に伝えるための方法を学び、相手に伝えることができる。 36%→40%	相手に場に応じて、自分が伝えたいことを聞き手に効果的に伝えることができる。 22%→31%	単に情報を発信するだけでなく、他者を動かすことができるような情報発信をすることができる。 4%→20%	・4月に行った「Hallweardoへ今、私たちにできること～」の動画を作り、新型コロナウイルスに対しての情報を発信し、多くの人に協力してもらった音声ができたから。(S)

## 2 生徒の感想

### (1) アート班

- ・防潮堤ができたことによって、本来は見えていたはずの三崎の綺麗な海を見ることができなくなった。そこで、ただ防潮堤に色を付けるだけでなく、アートイベント（MAP）を企画することによって地域の方々と交流できる機会とした。コロナ禍ということもあり、参加者をグループ分けして感染予防に努めた。イベントでは保育園児から高校生まで多くの児童・生徒に参加していただき、充実した活動になった。大きな絵を描く機会ができて、個人的には本当に楽しかった。しかし、一度きりのイベントでは地域貢献にはつながっていないと感じる。アンケート結果を皆で共有し、地域をアートで活性化させたい。
- ・MAPと並行して、流木を使ったベンチ作りを行った。ゴミを再利用することで新しいものを生み出せるということを学んだ。先生のご指導もあり、設計図から丁寧に作成することができ、とても勉強になった。今年度中の完成を目指したが時間が足りず、完成は後輩に任せることになったので、是非完成させてほしい。

### (2) 情報・防災班

- ・自分は、どちらかというと「情報」の分野に興味があったので、アプリ開発に力を入れて活動に取り組んだ。しかし、設備等の関係で編集に時間がかかったり、フリーズしたりという状況で、思ったように進められなかったのが残念だ。やはり、ある程度のクオリティのものを作るには、作業に適したパソコンを複数用意するなど、環境を整えることも大切だと思った。現在はアプリではなくRPGを製作しているので、後輩たちには、ぜひ完成させてほしい。どちらにせよ、時間がかかると思うので、年度当初にしっかりした目標を立てて時間を大切に、毎時間の行動を意味のあるものにしてほしい。また、班の中で役割分担を決めてそれぞれが目標を設定して活動したり、情報を共有したりして活動していくことも大切だと思う。
- ・地域の方々の防災意識を高めるために何ができるかと考え、昨年度は防災かるたを作成し、地域イベントで披露した。そして、今年は「防災」というものをもっと身近に感じてほしいということで、防災RPGの製作に取り掛かった。当初は予定通り進んでいたが、PCのスペックの問題や作業効率が悪いこともあって、本年度中の完成には至らなかった。しかし、発表会でゲームの試験版を披露したところ、多くの生徒が驚き、興味を持ってくれた。このことから私たちの活動が間違っていなかったと感じた。また、情報・防災班の活動を通して、人前で話す機会が増え、少し自分に自信が付いた気がする。

### (3) イベント班

- ・限られた活動の中で、少ない行事やイベントに参加し、「みさこうたいそう115」を通して、たくさんの方々に笑顔になっていただくことができた。その様なときにこの活動に強くやりがいを感じることもできた。2年間みさこうたいそうのリーダーとして活動できて本当に良かったと思っている。このことがきっかけで、人前に立って何かをするとき、不安やプレッシャーが勇気や自信に変わり、一歩大人に近づくことができたと感じた。今後は座って行う体操やコロナ禍の状況に適した体操の案を出していけば、活動の幅が広がると思う。そのためには、班の中で話し合うのもよいが、ほかの班から意見をもらったり、地域の方々からアンケートを取って意見をもらったりすると、より考えが深まると思う。
- ・本校主催の「みさこうフェスティバル」やオンラインイベントである「四国オンラインフェス」の経験を通して、オンラインでのイベント実施の可能性を感じた。オンラインだからこそつながることのできた方々との交流は、イベント参加班にとっても大きな自信となった。しかし、チャット上でのやり取りやタイムラグがある相手とのコミュニケーションは、自分が想像していたよりも難しく、今後オンラインとオフラインを融合させたイベントの企画を行うためにも改善しなければならないところである。

#### (4) カフェ班

- ・今までは町内で行われるイベントに不定期に参加する形であったが、今年からはまりーな亭をお借りして運営することで、これまでよりも開店する回数を増やすことができた。また、テレビで取り上げていただくこともあったので、みさこう Café の知名度向上につながったと思う。インタビューを受ける機会も多かったので、自分が思っていることを言葉にする力が成長したと思う。また、自信をつけることもできた。初めは慣れない動きにとまどい、焦ることもあったが、落ち着いて行動することができるようになった。衛生面の徹底や接客などに改善点があったと思うので、全員で意見交換を行い、役割を決め、やるべきことを徹底していく必要があると感じた。そのために、専門家の方にアドバイスをいただきながら、必要なものをそろえたり、必要な練習を重ねたりすることで、より良いカフェになっていくと思う。
- ・地域イベントへの出店をしていた頃と比べると商品の質や接客の質も格段にアップしたとを感じる。毎月のオープンを楽しみにしている地域の方々のためにも、サービスの質をもっと向上させたい。また、1年生が入ってきたことにより、作業を分担することでできた点は良かった。来年度は新しいメンバーも入ると思うので、カフェの存在意義をチーム全体で共有するようにしたい。

#### (5) 商品開発班

- ・1年間を通じて、充実した活動を行うことができた。昨年度はアイデアを思い付くだけで形にするところまで持って行くことができなかったが、今年は、防災食である「みそボール」の開発やみさこう Café のサポート、そして、来年度からの FOOD EX JAPAN に向けた取り組みもスタートすることができた。毎週の活動に向けて家庭で練習をすることもあった。しかし、商品化できたものは一つもなく、一番の目標を達成できなかったことは反省である。
- ・「みそボール」「燻製」「クッキー」「海鮮丼」など、様々な商品の開発に挑戦することができた。特に、みそボールについては、防災訓練の時に地域の方々に振る舞い、喜んでもらえてうれしかった。自分自身で成長したと感じるところは、リーダーとして後輩をまとめることができるようになったことと料理が少し上手になったことである。逆に課題や反省すべき点は、最終的に一つの商品にできなかったことや製作の過程で食材を余らせてしまったことである。来年度はもっと計画的に準備を進めていきたい。

#### (6) ツアー班

- ・班の中に地元出身の生徒が少なく、おすすめスポットの紹介や詳しく調べる作業に苦労した。しかし、班員で協力して予定した活動を最後までやり切れたので良かった。最初は、地元をPRする活動にはあまり興味はなかったけれど、様々なポイントに行ったり、調べたりする中で、この活動に興味をわくようになった。そして、今では、三崎のことや伊方町のことをもっと多くの人に知ってもらい、有名になってほしいと思うようになった。地元の方と話したりインタビューしたりするときに、思ったように話せず、自分のコミュニケーション能力の低さを反省している。もっと、コミュニケーション能力を身に付けたいし、後輩にも頑張ってもらいたいと思う。そのためにも、日ごろから学校で関わる人以外の人たちと積極的に話をするのが大切だと思う。
- ・地元をPRすることの面白さと難しさを2年間の活動を通して知った。高校生オリジナルのガイドブックを作成することで、伊方町の魅力を町内・町外の人に知ってもらえたらと思う。今年度は、リニューアルされた「はなはな」の佐々木さんと協働してプロジェクトを進めることができ、来年度にはガイドブックが完成する予定である。自分たちの脚を使って取材することは、とても面白かった。町の人と話して知った、地元の私たちでも知らなかった場所や、先生方や他の生徒が知っているオススメスポットに行き、改めて地元の良さを認識することができた。部活動以外でも先輩・後輩が関わるのできる活動は今後も続けていってほしい。

### (7) せんたん部

- ・3年間を通して行ってきた地域おこし活動も、今年は人を集められないなど、とても難しい課題が多くあった。例年行っている「せんたんミーティング」などはできなかったけれど。オンラインイベントへの参加や「#allwecando」動画の撮影など、コロナ禍においても自分たちで考え、いつもとは違う活動をする事ができた。それらのことを通して、コロナ禍での活動の難しさや、今まで恵まれていたことに気付くことで、今まで以上に応援して下さる地域や多くの人により一層感謝することができるようになった。オンライン化が進む中で、もっと積極的にオンラインを活用し外部の人から学ぶ機会を作っていく必要があると感じた。そのためにも、先生たちの言葉を待つのではなく、自分たちから行動していく姿勢がもっと必要だと思った。そして、もっと多くの知識を身に付けるべきだとも思った。

## 3 目標と実施状況

本事業の研究開発開始時に八つの目標を設定した。

本構想において実現する成果目標は三つある。一つ目の「生徒による3年間の地域協働活動における成果報告書の提出率100%」という目標においては、その準備段階として、本年度の在校生全員が成果報告書の作成に取り組んでいる。自らの探究活動を見直すことで、次年度への改善を図るとともに、自らの考えを論理的に表現する力を伸ばさせることができると期待している。二つ目の「高校卒業後地元への就職率60%」という目標においては、今年度の卒業生の地元への就職内定率は33%となっており、目標を下回った。本年度は就職希望者が6名と少なかったことや、遠方から入学した生徒や公務員希望の生徒がいたこと、昨年度まで求人であった地元求人が本年度はなかったことなどが理由として挙げられる。新規求人先の開拓などに力を入れ、三つ目の「高等学校卒業後10年以内の地元への就職率30%」という目標を達成できるようにしたい。

地域人材を育成する高校としての活動指標における目標も三つである。「地域と協働した取組を含む研究授業の年間実施回数5回」という目標においては、2021年度の目標達成に向け、本年度は各教科において研究に取り組んだ。具体的には、国語科の授業で3時間、家庭科の授業で4時間程度の時間で地域と協働した取組を含む授業を行った。地域人材を講師として招いたり、成果物を地域の人に見てもらったりすることで、地域の方にも本校の探究活動に興味を持ってもらう良い機会となった。「地域と協働した取組に関する年間研究発表回数5回」という目標においても、2021年度の達成に向け、本年度は研究を進めた。校内の研究発表会に加え、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、機会が制限される中で7回程度の研究発表を行い、幅広い年代や立場の方に本校の取組を知ってもらうことができた。特に、中学生一日体験入学や学校見学に来た中学生が本校の地域協働活動に強い関心を持つことが多く、本校の魅力の創出につながっていると感じている。「学校フェイスブックの1か月当たりの平均更新回数15回」においては、4月から1月の間で112回、月平均11回更新した。ライブ配信など新たな取組を取り入れることで、これまで以上に多くの人に本校の情報を届けることができています。

地域人材を育成する地域としての活動指標における目標は二つである。

「外部人材として参画する民間等の団体数10団体」という目標においては、現在7団体の参画がある。今後も多くの団体と協働することで、2021年度の目標達成に向けて活動を推進したい。「ブーメラン人材へのUターン支援プログラムの実施回数3回」という目標においては、本年度は3回の取組を行った。1、2年生を対象とした地域企業の合同説明会の実施や、「EGFキャンパスアワード2020-2021」や「第1回八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」などへの応募を通して、地域理解を深め、郷土愛を高めることができた。今後は、起業家育成講座や地元企業による合同就職説明会など、高校生だけではなく町外進学者なども対象とした支援プログラムを伊方町や地元企業と連携して実施することで、ブーメラン人材としてUターンする卒業生をさらに増やすことのできる取組を進めたい。

目標の多くが中・長期的な達成目標であるため、本年度はその準備期間という意味合いが強かった。来年度は、中期目標の達成に向けた具体的な取組を行っていききたい。

#### 4 次年度以降の課題及び改善点

昨年度から引き続き、探究活動が活発化し深度が深まっていくにつれ、生徒・教員ともに負担が増加するということが課題となっている。また、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、これまで本校が主催してきた活動や地域でのイベントが中止になり、探究活動の場が制限されるという新たな課題が生まれた。

負担が増加するという課題の原因としては、主となる活動時間が週に1時間の総合的な学習及び探究の時間しかないため、放課後等の時間を使わざるを得ないことや、各種行事が休日に行われること、突発的に高校への行事参加依頼等が入ることなどが挙げられる。

その改善策として、本年度は全学年で共通して、木曜日の6時間目を総合的な学習及び探究の時間に、7時間目を未咲輝学の時間としてカリキュラムを編成した。こうすることで翌週以降の授業と入れ替え、総合的な学習及び探究の時間もしくは未咲輝学の時間を2時間連続で実施できるようにした。全ての研究班で連携をとる必要はあるが、探究活動が放課後等の時間にまで及ぶ回数を減少させることができた。さらに、各教科の中で地域協働活動に取り組む探究カリキュラムの作成を推進することで、生徒の探究活動の自走性を高めるとともに、進路指導とも連携させることで時間を有効に活用できるようになると考えている。また、本年度は各種行事が中止になってしまったため、研究自体も進められなかったが、地域活動の増加単位制度について研究していきたい。地域行事等への参加に応じて、総合的な探究の時間もしくは学校設定科目「未咲輝学」において単位増を認めることで、生徒の、より主体的な行事参加を促すとともに、負担感の軽減につながるのではないかと考えている。これらの改善策を実行するためには、地域関係者との協議や校内の調整等が必要になるため、関係者で話し合いを進めて導入に向けて検討していきたい。来年度は、まず生徒が参加する可能性のある地域活動や地域行事をリストアップし、それぞれの活動について、その責任者や活動時間等を明確にしていきたい。そうすることで、活動への計画的な参加や、増加単位制度のスムーズな導入を行いたい。

本年度より開設した学校設定科目「未咲輝学」では、学年ごとにテーマを設定して探究活動に取り組んだ。1年生は「地域理解」をテーマに、ブイアートの作成や地域の名所・史跡見学などの活動を地域人材と連携して行った。2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに、RESASを用いた研究を進め、その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募した。3年生は、「ブーメラン人材として」をテーマに、ビジネスプランの作成を行った。優秀なプランはブラッシュアップし、「EGF キャンパスアワード 2020-2021」に応募し、優秀賞を獲得した。

本年度より始まった授業であることに加え、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響で当初予定した授業内容の変更を余儀なくされた部分もあった。そのような状況の中で、生徒の実情を踏まえた上でどのように効果的な学習内容を設定、指導していくのかということが課題となった。本年度は開設1年目ということもあり、手探りな部分もあったが、来年度は今年度の実践を基に計画を立てるとともに、外部人材との、より積極的な連携や校内研修の機会を増やすことで、授業担当者の負担の軽減や効果的なシステムの構築を図りたい。

各種行事の中止による生徒の学びの場の減少については、今年度研究を進めてきたオンラインの積極的な活用により、さらなる改善を図りたい。もちろん、オンラインは万能ではなく、リアルな体験を通してしか学べないことも多い。しかし、オンラインの特徴である、即時性、広範性というものは、地域の学校にとっては大きな教育資源となる。オンラインでの活動をきっかけに、実体験につなげていくこともできる。リアルな活動とオンラインによる活動の長所と短所をよく理解し、それぞれを補完するような取組を行ったり、状況によって使い分けたりすることでそれぞれの活動から最大限の教育効果を生み出すことができる。With コロナ時代、情報化社会といわれる現代において求められる力は、リアルな体験とオンラインの体験に優劣をつけることなく、最大限の効果を生み出すことができるように取捨選択し、必要に応じて使いこなす能力であ

ると考える。教職員、生徒共にオンラインの効果的な活用技術を身に付けることで、本校の探究活動をより効果的なものにできるようにしていきたい。